

令和5年度 第2回 総合教育会議議事録

日時 令和6年2月8日（木）午後1時15分～

場所 市役所東分庁舎5階会議室

第2回総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和6年2月8日（木） 午後1時15分～午後3時15分
- 2 場 所 市役所東分庁舎5階会議室
- 3 出席者 いわき市長 内田 広之
いわき市教育長 服部 樹理
いわき市教育委員会 委員 根本 紀太郎
いわき市教育委員会 委員 宮澤 美智子
いわき市教育委員会 委員 小峰 美保子
いわき市教育委員会 委員 阿部 武彦
- 4 内 容 (1) 講演「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」
講師：長澤 悟 氏（株式会社 教育環境研究所 所長）
(2) 協議事項「不登校対策について」

【會議內容】

1 開会

2 議事

会議設置要綱第4条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第7条第2項の規定による第2回会議の議事録への署名は、根本委員及び宮澤委員が行うことを確認した。

(1) 講演・ディスカッション

① 講演

【長澤悟氏】

※「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方」の資料を基に講話を頂く。

(主な内容は以下のとおり)

- ・教育改革は大きな課題であり、現在、様々な取組みが行われている。
- ・私自身、国の調査研究に携わり、全国各地の学校づくりに関わってきた。
- ・本日はそこで目標とされ、また、そこで関係者の皆さんが参加して議論しながら取り組まれていることを紹介し、いわき市の学校施設整備のこれからの在り方を考えていくうえで、少しでも参考になるような話ができれば

と思っている。

- ・私が最初にいわき市に来たのは、昭和の末だが、以前、日大の工学部に勤め、12年間三春町に住んでいた。その時、いわきニュータウンのまちづくりに携わり、子どもたちや先生方と一緒に、まちのことを大きな模造紙に表現するワークショップを3、4年継続して実施した。その際、高久小、四倉小、好間小などの市内の学校名を覚えた。また、子どもたちが地域のことを一生懸命考え、先生方も一緒に関わっていたことが、今でも印象に残っている。
- ・今日は、これからの学びを実現する学校と地域の核となる学校づくりということで、講義させていただく。
- ・今日は、不登校の話題もあるということで、それに併せて1枚スライドを追加した。学校とは心をぼろぼろにするところではなく、心を磨くところ、怠けるところではなく、努力するところ、仲間外れにするところではなく、認め合うところ、みんなが待っているところ、また明日行きたくなるところ、学校とは生きる喜びを学ぶところである。これは当時の三春町教育長が、先生、保護者、地域の方に投げかけた言葉であり、この言葉は学校づくりを進めるうえで私のベースとなっている。
- ・現在、知識、技能というのは1人でも学べる。それでは学校で学ぶということはどういうことか。学校というのは、そこに人がいて、自分と違う他者がいて、その子どもと一緒に学び成長し、その中で自分を知り、社会を知り、それから褒められることで喜びを感じ、喜びをみんなで感じながら、みんなで助け合い、学びを深める。そのためには、その場となる施設環境空間というのが大事である。そういう観点で学校を捉えるべきであり、さらに地域の在り方に繋がっていくものと考えている。
- ・学校施設を考える場合は、日本の学校を取り巻く状況や課題を整理する必要がある。デジタル化による社会の変化は、知識の覚えだけではなく、課題を見つけ、それに自ら取り組み、協働しながら、学びへの態度を育てることが教育の大きな課題・目標となっている。
- ・日本では、GIGAスクールとして、1人1台端末、校内情報ネットワークの構築を進め、いずれも100%に達している状況である。次はそれをどのように活かすか、また、子どもの多様化に対応するインクルーシブ教育や先生方のシステム環境の充実、小学校から中学校までの9年間の成長を見通した小中一貫教育であれば、義務教育学校、それからコミュニティスクールとして地域を支え、地域が支える学校の在り方というのが課題である。
- ・一方、そのための施設整備を進める上で、新型コロナ対応をはじめ、少子化の進行、既存施設の老朽化、自然災害の激甚化、脱炭素化、地球温暖化対策など、総合的な検討が求められている。それを実現する上で、公共施設マネジメント、或いは複合化、そのような観点も重要となる。

- ・教育、学校施設の課題に対し、学習指導要領の改定が行われ、問題解決型学習や探究学習、或いはアクティブラーニング、多様な学びの必要性が示された。探究学習の教育活動のサイクルの1例だが、1時間、或いは1つの单元の中で、学習の内容やねらいに応じて学習形態、或いは学習場面は変化する。そこでは机が並ぶだけの教室などの脱却が求められるといえる。
- ・新型コロナ対策やGIGAスクール環境を背景に、令和3年に令和の時代の日本型教育という中央教育審議会から答申が出され、これを受けて、施設部門で新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方、施設の在り方についての協力者会議での検討がはじまった。その報告書は一昨年3月にまとめられ、新しい時代の学びを実現する学校施設を示している。
- ・具体的には、「Schools for the Future」未来志向で実空間の活用を捉え直し、学校施設全体を学びの場として創造するには、未来志向、実空間、学校施設全体などのキーワードが重要である。このような場合、従来、多様な教育方法に対応する学校施設という表現が用いられていたが、今回は新しい学びを実現するという言葉が使われている。
- ・教育を変えるには施設環境の変革が不可欠である。施設が変わらないと教育も変わらないという認識が、実は教育専門の委員から示された点に非常に大きな特色があった。
- ・報告書では全体構成を大樹に捉えて、学びを太い大きな幹とし、豊かな生活の場、それから地域との連携を共創し、これを大きく太い樹に広がる樹幹とし、それをしっかり支える根として、安全と環境、これは事故等に対する安全、或いは、事故や不審者に対する安全という側面と、災害時に対する安全、環境は快適で健康的な環境という側面と地球環境にやさしいという意味合いが含まれ、しっかり支える施設の全体像を描き、具体的な目標・内容が示されている。
- ・未来志向の視点ということで、要点はビジョンや目標を共有すること。これは画一的固定的な姿からの脱却を図ること、体質機能或いは特定の教科などにとらわれず、内容も集団も横断的な学び、柔軟に対応していく。学校施設全体を学びの場と捉え直すことが示されている。このような姿勢でみんなで考えていこうということである。
- ・翻って学校というのは、それぞれが共通の体験を持つことから、意見が出しやすい。一方で、みんな同じ空間の体験、同じ授業の体験しかないと、そこから抜け出した発想が逆に難しいところがある。この固定観念からいかに抜け出すかということだが、ここで2つヒントをあげれば、1つは部屋から活動を考えるのではなく、時間軸を含めて学びの情景や活動の場面を描き、それをどのようにしたら、それが実現できるかというイメージを描くことが重要である。2つ目は、従来の室名をもとに考えることをやめることが求められる。今日はそのような観点で、様々な事例を紹介しながら話を進めていきたい。

- ・これからの学習空間を考えるときのキーワードを少し整理したい。学校は昭和 50 年代後半くらいから、教育、施設の変化が始まった。その時のキーワードがオープンであった。オープンというのはフレキシブルでアダプタブル、柔軟で可変的、可能性のある空間、自由度の高い環境をどのようにつくるか。現在、その次の大きな時代の節目にあると私は考えている。
- ・今のキーワードは、このオープンという言葉も包含しながら、コモンということができるのではないかと考え、それを提唱している。その中身は、シェア、多様である。多様な空間があり、連続的にそれらが配置されている。早い変化に対し、モードチェンジできる。同じ場所が、場面によって別の用途に利用できる。冗長性、インクルーシブ対応力、拡張性の高い空間設備を備えることが、今の目標である。
- ・もう 1 つのキーワードは、リアルである。実空間という考え、或いは、ウェルビーイング、心地よい、そこにいると幸せな気持ちになるということ。活動や空間を満たす実空間として、子どもも先生も心地よい、ここが好きだという気持ちが新しい活動を生み出す原動力になると考えている。
- ・最後に付け加えれば、デジタルの AI、それから学び合い、教え合い、褒め合い、それから友達が自分と違う人がいるという出会い、それはもちろん愛情に繋がるだろう。こういう言葉を基本に見据えながら、施設を考えていきたい。
- ・先ほど「コモン」がキーワードであること、それから名前を変えてみようということも話した。例を示すとクラスルームを「学年コモنز」或いは「チームコモنز」、「教科コモنز」、図書館は「ラーニングコモنز」、特別教室は「創作コモنز」、「STEAM コモنز」になる。職員室を「教職員コモنز」、学校空間全体を「スクールコモنز」と呼び、学校と地域をつなぐ空間を「共創コモنز」、何々教室と言えば、従来の部屋の姿が頭に浮かぶが、「コモنز」と呼ぶことで、皆さんの頭の中が動き出すことを期待している。
- ・学校を構成する 1 つ 1 つの場所を固定観念から考える。事例をもとに、紹介しながら話を進めていく。すでに事例があるわけで、架空の話ではない。
- ・教室というのは、4 間、5 間や 8 メートル四方という大きさがあるが、その教室自体を大きくできないかというのが課題になっている。要するに多様な学びを展開していくためには面積が狭く、それから 1 人 1 台端末を実現するとなると、机がもう一回り大きくないと教材が収まらない。そうすると教室の寸法を少し捉え直す必要がある。
- ・教室の正面性というのをなくし、様々な場所で勉強することを可能とし、どこでも子どもたちが集まってもいい場所とする。そういう意味では、南側が全部窓でなければならないということは必ずしもない。教室の後ろにロッカーがあるのは日本だけの教室風景である。
- ・もう 1 つ、学校全体の配置を考えると、教室が南向という固定観念だが、

なぜ南向きかというと、南の日照がとれること、夏の恒常風が南風であり、自然通風がよい。ただ、南向きの教室は、窓際は直射日光が当たり、暑く、眩しくてカーテンを閉めれば、通風がとれなくなる。実は南側が開けた北側の教室は最も評価が高い。カーテンを閉める必要もなく、南側が開けているため、明るい日差しが感じられる。そのこと自体が固定観念から脱却することに繋がる。

- ・教室はなぜ四角でなければいけないのか。大きなコーナーや小さなコーナーがさらに連続し、大きな多目的スペースがある教室を計画し、ちょっとした小上がりがあれば、そこが机が並んだだけの教室とは違う活動の場になる。また机を大きくすることは、幅はよいが、奥行きが確保されていないと、物が落ちてしまう。議論を先生方と重ねて、60センチの正方形の机を採用した例がある。これが唯一の正解ではないが、要するに何を求めるか課題を明確にし、議論を進め、その姿をみんなで考えていくことが求められる。
- ・東京の府中市において、北側にも教室があるが、教室は中廊下で南側が開けていない学校がある。ただ、最上階であることから、上部から光が採れて風が抜けるようになっている。北側だが快適な環境が用意されており、ロッカースペースは教室の外側に置かれ、そこがまた違うクラスの子ども同士の会話、交流の場にもなる。ただ単に小さい部屋を作るのではなく、1つの部屋の中に、空間の構造化、学習のスペースやグループスペースなどをコーナーで構成する。これも学習の場面をきちんと指導の場面をイメージし、先生方と議論しながら作り上げていく空間となる。
- ・次に学年コモンズ、1学年のクラスが多い場合には、チームコモンズという2、3クラスのまとまりで全体を構成している。先生同士が日常的にチームを組み、子ども達をフォローしやすい単位となる。2教室或いは3教室と多目的スペースなどを組み合わせたひとまとまりのスペースがすべて大きな教室となる。1人あたりの面積を確保し、家具を用意し、新しい教室もあり、教室の中は、個人の机が置かれ、そしてその前のスペースは様々な家具や機材が置かれ、活動が行われる。
- ・学年活動のユニットの例について、CSと書かれてあるセミオープンである。QSというのは、閉じられる教室で、LLがいわゆる多目的スペース、HBはホームベース。例えばCSが1年1組、QSが1年2組だとして、閉じた部屋で皆で大きな声を出して議論をする場合、1年1組は1年2組のQSを使うなど、多様な教室を用意し、それを使い分けていくこと、運営と施設をセットに考えるのが大事である。
- ・教科担任制の中学校はどう考えるか。従来教室と小学校のように、学年のまとまりを作りオープンスペースを設けるだけでは、多様な学習というのは生まれにくい。また、教科教養のため整備するのが難しい。三春や会津で議論をした際は、教科ごとに専用の教室を作り、教科ごとのメディアス

ペースを用意した。

- ・ロッカースペースはホームベースの形で、その教室に設置した形で用意する。教科の教室というのは、普通教室のように同じように作る必要はないため、教科ごとの要求に応じた教室を用意する。或いは前の学習履歴をそのまま保存し、次の時間にも使うことができるようなことも考えられる。教科のメディアスペースには、様々な教科ごとのしつらえがされ、学びを待ち受ける舞台・ステージが用意される。
- ・環境を整えるということについて、一般的に小学校は賑やかだが、中学校は殺風景であると思われる。教科を自由にできる教室がない。それが自由にできるとなると実は教科の世界というのは、中学校はより明確であることから、実は非常に魅力的な教科の世界が用意されることになる。同時に、その教科の教室は共用の部屋になることから、そのクラス専用の場所として、ホームベース、ロッカースペースが教室の隣に用意されることになる。
- ・先ほど話したとおり、多様で柔軟な空間を学習の場として仕立てていくためには、家具が必要である。同じ空間で家具がある状態とない状態での様子で、そこでは子どもがいなくても学習の雰囲気、空気がある。その場所を選びながら、その場所を生かしながら、次の学習を生み出す力にもなる。大きな机や組み合わせができるテーブル、教材を用意しておける棚などは広い空間の中に程よいスケールの場所を生み出す道具となる。同時に学習の場を集中、自由、或いは個別ないし協働という分けて整理すると、一緒に集中する、例えば「じっくりイキイキ」、みんなで「ゆったりワイワイ」、少人数で自由に「ほっこりワクワク」、1人で集中「みっちりモクモク」、このように整理すると、またそこに用意したい家具が思い浮かんでくる。多様な家具が多様な活動を生み出していく。
- ・図書館、ラーニングコモンズ、学校の中心は何か。学校の中心に何を置くのが良いかという議論を先生方とすると、図書館という答えが返ってくる。実際に学校ができたあと、子どもたちに一番好きな場所はどこかというアンケートすると、間違いなく図書館という回答が返ってくる。或いはホームベースという答えも多い。標準的な校舎の多くは、三階の一番廊下の突き当たりに図書館があり、図書館はいつも使えなくなっている状態である。一番好きだと言われる可能性のある部屋が閉じられているのは、もったいない。宝の持ち腐れの状態だというのが、従来の設計の校舎であった。そこは、いろいろな場所を選んで本を読んだり、或いはそこで発表したり、コンピューターを使い学習する場にもなる。
- ・図書館が学校の中心に位置し、子どもが主体に学ぶ学校づくりということを掲げてつくられた私立学校が軽井沢にあるが、図書館が学校の中心であり、その周りに教室がある。これが学び、未知の世界に子ども達をいざなう。

- ・ワクワクするのが特別教室である。特別教室は、普通の教室の1.5教室分あり、その半分くらいが準備室になっている。そこはカタログにある実験台や図工台などが並べられているが、教室からわざわざ出かけて、自分が好きなことができる場所は、もっと楽しく本物の場所にしたい。天井の高いスタジオ、キッチンスタジオ、アトリエ、ホールなど。
- ・スウェーデンの学校では、まさに特別教室は、みんなが一斉にグループで同じ実験をしたり、同じものを作るのではなく、あるテーマ設定のもとで、自分の発想で何を作るか考え、それをかなえる道具や材料が常備されている。準備室というのは管理のために、いつも鍵がかかっているのではなく、むしろ子どもたちにその発想のもととなるような道具、材料を用意する場所として捉える。
- ・風越学園のアトリエだが、いろいろなことにチャレンジ、トライできる場所である。さらに特別教室は廊下に1つではなく、教科同士が関わりを持ちながら自分が好きな実験、創作に取り組めるようなコモンズを作ることが大事である。
- ・職員室は個人机が並び、後ろの方にビニールクロスをかけられた大テーブルがあり、そこでお茶を飲んでいるようなイメージである。子ども達を待ち受ける相談場所、スタンディングテーブルやカウンター、ソファなど、込み入った話の子は近くの相談室でコミュニケーションがとれる。それから先生同士のコミュニケーションの場所として教職ラウンジが備えられ、ゆっくりするだけではなく、打ち合わせをしたり、1人で作業したりできる場所になる。事例だが、机は個人机がなくて共通の机、椅子、机の上は、きちんと片付けられ、そこに集まり、いろいろな活動ができるような場所になる。さらにリフレッシュできる場所があったり、共用の作業スペースがあったり、教材製作のスペースがある。学校経営センターというのは、校長室のことである。
- ・この考え方の1例だが、個人机が並ぶのではなく、代わりに1人1人の先生の持ち物、教材をしまっておけるロッカーが別にある。職員室の個人机ってというのはそこで作業する場所というよりは、個人のものを収納する場所になっている。それを一旦、机は机で収納は収納と分けてみる。
- ・フィンランドの学校では、ラウンジがあったり、スタジオやコンピューター作業場などがある。みんなが集まるところには、ケーキがおかれていたりする。
- ・同志社中学校のコンセプトは「学校は博物館」である。ここの学校は教科教室型をとっている。そのため教科ごとに教科の世界が作られ、それを総称して、学校は博物館としている。子ども達を学びに誘いかけるものが用意されている場所である。
- ・学校の中に座る場所があり、画面があり、メディアがあれば、そこが交流の場所となり、学びの場所となっている。

みんなが集まる場所も、例えば大きなホールを作るのではなく、学校の空間をうまく見立て、大きな階段があれば、そこが発表の場になる。つまり足し算をすると面積がどんどん膨らんでいくが、それをうまく重ね合わせながら、必要な活動ができる空間、面積を過大にしない設計、工夫がある。

- ・スウェーデンの学校では、学校中いたるところに座る場所がある。ソファであったり、バランスボールに座っている。これは教室の中で、このような椅子に座って授業を受けているが、みんな集中している。学校全体に椅子を置く試みをチェアリング、或いはソファリングと呼ぶ。このような場所が学校のいろいろなところにあると学校中が居場所になる。1人、2人でおしゃべりしていると、みんなが集まってくる。人がいなくても人氣が感じられる。豊かな場所として学校を捉えられる。
- ・学校のトイレは、家のトイレ、公共施設のトイレと並んで特色がある。最後1人きりになるのは、ここに座ったとき、個室だということ、ゆとりをもって明るいトイレを作る、そうするとみんなが大好きな場所になる。鏡を見ながら髪の毛をとかし、友達と話すのは、女子生徒にとってはこんな幸せな時はない。
- ・保健室は、具合の悪い子を処置するところではなく、健康教育を発信する空間である。それから相談室もまず心を解いて相談できる状態にしてあげられる場所として整えていくべき。
- ・後はタイトルだけ紹介し、今後、議論があるときに話題にしてほしい。まず、義務教育学校施設一体型の小中一貫教育校ということで、メリット、デメリット、課題はあるが9年間のデザインが求められる。昨日まで幼稚園に通っていた子が、明日から高学年の子と一緒に過ごす場所であり、その中で、どのように成長が感じられる学年のコミュニティを用意するかである。ほとんど教室で学習も生活も行う1、2年生、特別教室に出かけて少し社会性が高まる3、4年生、教科担任制が導入される8、9年生になると教室にいて先生が来るのを待っているのではなくて自ら教室に行く教科教室型をとる。
- ・学校と地域の関わりだが、近江八幡市の例で、コミュニティ単位を中心に小学校とコミュニティセンター、児童クラブ、学童保育などを擁する。コミュニティセンターには、その地区の消防団の車庫がある。消防団の詰所もあつたりする。それぞれがバラバラにあつたものが学校と一緒にすることで、運動場や図書館を利用することが可能となり、逆に学校側もコミュニティセンターにある施設を使うことができる。お互いにとって、WinWinの関係をどのように作っていくか、それがまた日常の触れ合いを生み出す手がかりにもなる。
- ・青森の学校の例だが、ここの地域の人たちの長年の夢は、町民の図書館であつた。それから、伝統芸能をみんなで鑑賞できるようなホールが望まれていた。ただ、単独では、財政的に困難であつたため、中学校を建設する

のが最後のチャンスということで、学校とホールを作り、1階に地域の図書館、2階に中学校の図書館を作り、中学生は地域の図書館も使えるようにした。それから体育館がある特別教室棟は地域の人達も利用し、地域の活動も充実する。このような事を想定して体育施設を作ること、学校の子ども達にとっても、教育機会が充実することになる。

- ・次は、ふたば未来学園についてだが、地域の人たちが利用する施設というのは、門の近くで、中に入り込まない場所にあるのが一般的だが、ここは大通りを用意し、その一番中心に地域の人たちがいつでも来られる場所を作った。
- ・地域の施設を作る時には、地域材を使う。子ども達にも地域の人達にも喜びを与える。木と付き合うことで、子ども達が自然に育っていく。特に地域材を使うときは、その仕組みを作る必要がある。それが地域づくり、或いは地域の産業づくり、学校を支援する地域づくりにつながっていく。長寿命化改修の際、地域の材料を使うことで、まったく違う空間として生まれ変わる。
- ・環境面のエコスクール、ZEBの取り組みについて、学校では、少なくともZEB Orientedではなく、幾つか段階があるが、どのように地球環境に配慮した施設づくりをしていくかだが、学校だけではなく、大きな取組みの中の枠組みの中で学校をつくる。実現するためには、様々な制度をいかに研究して、いかに活用していくかということ。エコスクール・プラスであるとか、木材を使うについても各省庁の支援措置がいろいろある。バリアフリー化、避難所施設としての施設づくり、水害対策といったもの、新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業などがある。
- ・1つ紹介したいのは、地域の人が学校を利用する場合、スマホで予約することができる。そういう学校づくりもある。
- ・地域の人たちや先生方が集まって議論を重ね、そこに子ども達も参加し、それぞれの専門家が協働して学校を考える体制を作る。そのプロセスは、学校は誰かがどこかで作っているものではなくて、みんなで作るもの。そういうまちづくりの力をぜひ、市として発揮し、今度はいわき市から他のところへ発信する学校を実現してほしい。

(2) ディスカッション

【市長】

- ・長澤先生、貴重なご講演ありがとうございました。
- ・私から二つほどお話しさせていただきたい。
- ・一つ目は、講演にもあったとおり、新しい学力観や学習指導要領の中身については、私たちが子どもの時より変わってきている。
- ・主体的、対話的な新しい学び方に対応するためには、ソフトの部分だけでなく、ハードの部分を融合することにより、相乗効果を出していけるもの

と、今回の事例から良くわかった。

- ・特別支援学級や英語、社会科などのクラスについての事例があったが、学びのスタイルに合わせる形など非常に参考になった。
- ・いわき市は、大部分の学校について老朽化が進んでいるが、これは全国の自治体も同様の傾向である。
- ・改築すべき学校について、未だ建て替えられず古い状況ではあるが、改築には財源が大きく伴うため、国庫なども活用しながらやっていきたい。
- ・街中で景観を損なうぐらいのレベルの学校もあるが、最先端のものにリバイスできるものと発想を転換していきたい。
- ・改築のタイミングで、新しい学びのスタイルを取り入れ、新しい学力観などをつくり出していけるように取組んでいきたい。
- ・市長になって2年間、学校ごとの課題を示したカルテや支援チームを作り、課題を摘出し、それを支援するなどの体制はできているが、ハード面については、ソフト面が優先だったことから、やっと着手できてきている状況であったため、非常にタイミングよくご講演をいただいたものと実感している。
- ・二つ目は、学校とコミュニティ施設の融合の事例についてだが、こちらも大変参考になった。
- ・いわき市内には1,300の公共施設があり、市の財政規模からすると、公共施設が多すぎるため、将来的には、1,000から900、若しくは、それ以下にしていかなければならないと思っている。そのような中、体育館、公民館や市民ホールなどについて、学校を改築するタイミングで、他の施設を融合して作っていく事例など、非常に参考になった。
- ・四倉地区においては、3月に市街地再生整備の計画発表をする予定であり、当該地区でも小中学校と公共施設の複合化を予定しており、古い施設をたくさん抱える本市においても、その周回遅れから脱却するため、先頭目指して走っていくタイミングで新しいコンセプトを入れていくなど非常に勉強になった。
- ・本市においてもスマートロックなどいろいろと研究中であり、公共施設の新しい方向性を示すにあたり、今後、そのようなことも考えていきたい。

【根本委員】

- ・私も古いタイプの人間であるため、学校の造りと使い方については固定観念があったが、今日、講演を聞いて、学校は先生や地域などが話し合って作り上げていくものだ認識した。そのように作り上げていくことで親近感が湧くことと、これから学校の統廃合の問題も出てくるかと思うが、そのような時も腹を割って話すことで、難局を乗り越えられるのではないかなと思った。
- ・学校の使い方についても、教室は教室だという固定観念があったが、1つの使い方だけではなく、いろいろな使い方ができるように考えるのが必要

だと思った。

- ・市長からも話があったが、いわき市は学校施設も多く、全てを一挙に実施することは難しいため、四倉地区のようにまず1つやってみる。
- ・それからもう1つ、遠野地区でも、今度、4つの小・中学校が再編されるが、再編後の遠野小学校と遠野中学校のハード面の改善など、市長にもぜひバックアップしてほしい。

【長澤氏】

- ・学校施設ができたときは完成ではなくてスタートである。
- ・施設の中心になるのは、建築家ではなく、学校の先生方であり、地域の方々であり、子どもたちである。
- ・当事者として参加して、自分の思いがこもったもの、それから自分の地域にある小学校の先輩が苦勞して、工夫しながら実現してきたものを受け継いで活動を生み出していく。そういう力を持つ学校を作るためには、その施設がよくできているというだけではなくて、持続するのは、その物語というか、それを生み出したプロセスだと思う。
- ・学校数が多いと特定の学校だけ立派にするわけにはいかない。やはりモデルを作るのは大事である。モデルを作り、みんなに対し目指すのはこれだっというものを共有する。そのモデルを検証し、次の学校施設整備の基本方針としていく。
- ・教育というだけではなく、まちづくり、住環境の整備として、市全体の事業と考え、取り組んでいく。

【小峰委員】

- ・私も教師を38年間勤め、退職してから7年経過する。
- ・教師は、子どもたちに夢や希望などを持たせる存在だとずっと思っていた。この資料を見たとき、すごくワクワクした。このような学校があったら、きっと子どもたちは毎日、学校へ通いたくなり、友達に会って色んなことをしたいと思えるそういった学校が、色んな形で資料としてあり、とてもワクワクした。
- ・長澤先生が話したように、ただ、施設だけが整えばいいというものではなくて、どのような学校にしたいか、どのような街にしたいかということをしつかりみんなで話し合いながら、いろいろな人に関わってもらうことがとても大事だと思った。建物だけでき上がって、教育しなさい、それではなかなか持続できないところがある。
- ・最初から、どのような学校にしたいか、どのような街づくりにしたいかっという話を話し合いながら考えていくことが、これからは大事であると感じた。
- ・また、今まで学校はこういうものだ自分でも固定観念があったため、そこから変えていく視点についていろいろとお示しいただいたので、とても楽しみである。

【長澤氏】

- ・どこかに正解があるのではなく、答えはみんなで出すものだと思う。
- ・今日始まる前に、総合政策部の職員の方と挨拶したが、やはり、市ぐるみで学校施設整備に取り組むことが非常に力強いことであり、いわき市はそういう学校づくりをこれから進めようとしているメッセージを受け取った。
- ・あとワクワクするのは、子ども達はもちろんだが、先生方もワクワクするような仕組みが重要。学校には、先生だけでなく、事務職の方とか、関わる学校の職員の方がたくさんいる。最近は職員数を計画する時もスクールサポートスタッフというか、その人たちが職員数に入り込んで、一緒になって教育を作り上げている事例もある。
- ・チーム学校という言葉があったが、まさに地域の総力を挙げ、市の関係者が一緒に目標を共有して取り組んでいけると思う。学校を作ることは、楽しいことであり、みんなから喜ばれること。

【根本委員】

- ・ワクワクということだが、私が住んでいるところは、平第一小学校の学区だが、この小学校は、木のぬくもりがあり、いろんなところに座れる場所がある学校で、読み聞かせに来てくれる方もいたり、保護者の方など、ぜひ学校に行きたいというような声も多く聞いたりする。やはり保護者や地域の方々もワクワクするのではないかな。

【長澤氏】

- ・今日のために、いくつか市内の学校を教育委員会の方々と一緒にまわらせてもらったが、平一小はなかなか良かった

【宮澤委員】

- ・私は保護者として出席しているが、子どもの授業というと、「めあて」とか「ねらい」があるが、今日ここにいる大人の「ねらい」は、長澤先生の言葉を借りると、経験やイメージからの脱却、これがまず1つ目の「ねらい」だと感じた。
- ・いろいろ資料を拝見し、知らないと何も始まらない。そして自分事として、子どもによくしたいと言うが、大人が楽しみ、行政や地域の方、保護者みんなで一緒になって、考えていくのが大事だと思った。
- ・長澤先生の言葉で言うと、教育的発想が制約を受けているということを話していたが、私たちも学校へ訪問した際、現場で働く先生も肌では感じていると思うが、大人になってくると、どこか仕方ないとか、そういうものだと半ば諦めていて、そういう気持ちを無意識に抱いてしまう。施設環境の改革は、長澤先生がお話しした未来志向の教育改革に繋がっていくことがわかった。
- ・私たち大人たちは、老朽化が進んだ施設を見ると、予算だとか、どれだけ手間がかかるのだろうかとか、その方法論もわからず、そのような考えが先

走ってしまい、心は動いているが、行動できない部分もあったことから、今日、この話を聞いたことはすごく意義があった。

- ・子ども達の授業風景を見ていると、学校は制約された箱のようなイメージがある。長澤先生が今まで時間をかけてきた財産ともいえる資料を見ると、洗練されていて、私は海外のコワーキングスペースをみているような印象を受けた。カフェの空間や、学校の創造性、スタジオ空間のある印象を受けた。それから知的好奇心や探求心、博物館などが興味深かった。本当にワクワク、刺激して、科学的な研究所みたいな空間、子どもが行きたいと思う学校を私たち大人と一緒に考えて、作っていかねばならないと思った。
- ・長澤先生に質問があるが、先ほどのお話で、モデルをつくり、それをみんなで検証することだったけど、いわき市も100校近くの小・中学校があり、老朽化が深刻である。まず、最初に何からやればいいのか。北塩原市の事例を見ると、本当にわかりやすい。トイレの空間デザインや木製サッシなどの事例があるが、どこから取り組めばいいのか、行政も私たちも一番知りたいところである。

【長澤氏】

- ・明確な答えがあるわけではない。学校ごとに課題が違うため、まずそれを見つめる議論が大事だと思う。
- ・木の板を貼るだけで学校のイメージはガラッと変わる。それは教育方法の新しい学びの空間、その空間を変えることにはなっていないが、木の雰囲気があり、居心地が良く、この場所が好きだという気持ちが湧いてきて、それが子どもたちにとって、学校のイメージや子ども同士の環境を生み出す。たかが木を貼るだけというふうに思わず、環境を変えることにトライしてみる。
- ・小田原市では、学校が50校くらいあるが、大半が築50、60年である。まず、何から着手したかという点、市の農政課が中心となって、20、30㎡の材木を支給し、それをどのように利用するか設計者に案を作成してもらい、まず素材からできることに着手した。最初、学校の先生たちからは、もっと優先度が高いものがあるのに、どうして木材支給が先なのかと言われたりした。ただ、それでも環境が変わることで、子どもたちの様子が変わる。それから地域の人が集まる場所は、木をふんだんに使用したことで学校を見る目が変わる。2校目、3校目と継続することで、その効果が分かってくる。できることをやりながら、目指すところは、新しい時代の教育というところがあるというふうに思っている。
- ・子どもの学び場と言うことだけではなく、学校は人生100年時代の学びということを見ると、学び続ける場が大人にもあり、或いは学び続けることの大事さを子どもが大人の様子を見て、子どもが実感して育っていくことが、もう一つ大きく目指すところだと思う。

【阿部委員】

- ・スペースが変わるとこれだけ想像力がかき立てられることが、非常によくわかった。
- ・私は、高校の再任用教員だが、教え方も変わると思う。教師魂に火をつけるのが非常にわかった。
- ・このような学校で学ぶことで生徒は、いきいきワクワクし、それからお互いをリスペクトし合うと思う。リスペクトすることで存在を認め合い、社会貢献する心も育つのではないかと思う。
- ・ピンチはチャンスと言うが、これだけ学校が老朽化していれば、建て替える必要はないのは間違いないため、長澤先生が説明したように地域材を使用したいわき市独自の動きができ上がればいいと思う。そこで様々なタイプの学校が地域にでき上がっていけば、各地域が活性化していくと感じた。
- ・いきいきわくわく、そして学校がキラキラし始めるのではないかと、「いきいき」、「わくわく」、「キラキラ」だから頭文字を取って、いわきになる。そんな取り組みを進めて欲しいと心から感じた。

【長澤氏】

- ・ピンチはチャンスというのは、まさに東日本大震災からの復興の学校計画そのものであり、みんなが学校を作るのに立ち上がり、新たな復興の中心を作り、それが子どもの学びの場である。
- ・先ほど市長が言ったように、いわき市は、すでに周回遅れであることからトップランナーになるしかない。

【教育長】

- ・私も文科省のころから、ある程度施設に関わっていたが、これ程斬新な事例があるということで、私自身も固定観念があったと思っている。意識をいかに脱却していくかというのが、すごく新しい視点だった。
- ・他事例をもっと知る必要があり、行政だけで悩むのではなく、地域の方やいろんな関係者と議論することが必要だと思った。その中で、お互い想定していなかった発想が出たり、議論していくことが大事だと思った。
- ・現在、四倉再編の話があるが、昨日一昨日、その地域の方への説明会があり、そこで再編計画をどんどん進めて欲しいとの声が大きく、その中で、できれば四倉に引っ越してでも、子どもを通わせたいような学校を作ってほしいとの意見もあった。地域の方々の学校に寄せる思いは、すごく強いと思った。
- ・現実を振り返れば様々な資源が必要であり、今日、紹介いただいた全てを網羅するのはなかなか厳しいが、普段、我々大人が子どもたちに対して夢を持ってと言っているが、我々大人自身が夢を捨てたら駄目だというのは、今日改めて思った。

【長澤氏】

- ・最初、皆さんに投げかけた言葉だが、学校とは明日また行きたいところ、これは当時、三春町の教育長の言葉で、まさに子どもの夢が育つ学校にするには、教師の夢が育つ学校で、それは地域が育つ学校、キーワードは夢である。
- ・夢は見果てぬ夢ということで、実現しないことを表すところもあるが、吉田松陰のことばで、夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なしとあるが、やはり夢を語り合うのがスタートで、その中から、課題、目標が見え、できたあとに自分たちの関わり方が見えてくるのだと思う。私は、50年くらい学校計画に携わっているが、それは実感している。

【市長】

- ・本当に貴重な事例を紹介いただき、深い議論ができたと思っている。
- ・私も文科省に25年在籍していたが、小中高大のソフトの部分の関わりが多く、服部教育長はハード部分に専門的に携わっていた。
- ・地域との対話や他施設との融合のような話もあったが、私自身、手を付けられていないところもあり、思うところはあった。
- ・首長と教育長のペアだからこそ、周回遅れの状況を様々な事例を参考にしながら、果敢に取り組んで、夢を追いかけていきたいと思った次第である。

(3) 不登校対策について

担当部署説明（総合教育センター 坂本所長）

資料2「不登校対策について（現状と対策）」により説明を行った。

(4) ディスカッション

【市長】

- ・不登校の生徒が年々、増加していることは大きな問題だと思っている。
- ・チャレンジホームの説明もあったが、次の段階に向けて頑張っている子どもに対しての支援はよいのだが、そこまでの状態に達していない子どもも多数いると推測されることから、そのような子どもたちの居場所も大事であると考えます。
- ・チャレンジする以前にチャレンジできないような段階の子どもたちへの対応についても、これからの大きな目標であると思っている。

【阿部委員】

- ・実際学校に勤めていると、大きな変化が見てとれる。
- ・今の生徒たちは、自分の気持ちを言葉にできない子が多く、何か分からなく、その分からないという言葉も出せない。本当は、分かっているのかもしれないが、言葉に出すことをはばかっている。
- ・学校に登校せず、家に籠り、スマホをずっと見ている。高校に入学し、ほん

の1ヶ月程度でそのような状態になってしまう子も多々見られる。

- ・担任や学校も、本人がどのような状況なのか知りたくて、いろいろとアプローチをかけるが、本人から言葉が出てこないのが今の特徴である。学校側としても非常に頭を悩ませている状態である。

【市長】

- ・非常に悩ましい話である。こういう問題に対してどういう体制や対応をすればいいのか悩ましいところである。

【小峰委員】

- ・現状を資料等で見せていただいたが、市長からも話があったように、不登校が30日に満たない生徒も増えていることは、私自身も肌で感じている。ただ、不登校に対する学校や行政の取組みも目に見えてきている。教育委員会の対策だけではなく、子どもが産まれてからのサポートや子育てに対する悩みがある親たちへのフォローも実施されていると感じている。
- ・不登校の要因が様々であるということと、不登校の段階は、一人一人異なっているため、目の前の子どもが今どの段階で、どのようなサポートが必要なのか分かるのは、やはり目の前にいる先生、親御さんが情報を集め、その子の心に寄り添うことが非常に大事だと思っている。
- ・学校教育課で着手しているかと思うが、ハード面でどんなことができるか、或いはソフト面において、どのようなことができるかというのを絶えず連絡を取り合いながら、難しい問題ではあるが、できるところから進めてほしい。
- ・先ほど長澤先生の話にもあったとおり、チャレンジホームのスペースをもう少し明るくできないかと思っている。

【根本委員】

- ・不登校の子が、チャレンジホームに行ける児童生徒はいい方かもしれない。
- ・学校に行けない児童の親御さんで、居場所を作り、何か体験をさせたいというような考えの方もいたり、実際、計画している方もいると聞くので、そのような情報の共有や相談に対するアドバイスも必要だと思っている。
- ・今はチャレンジホームという名前だが、そこで自学自習しかできないということではなくて、いろんな体験ができるといい。その体験が直接、知識を得ることにはならないが、様々な体験をすることで、心がほぐれたり、自分はこういうことに興味があるんだとか、こういうことも世の中にはあるんだという気づきもあるかと思う。その時は、指導員の方や先生方、市民講師のような、いわきにもいろんな人材がいるので、そのような方に来ていただいて、体験してもらうことはいかがかと思っている。

【宮澤委員】

- ・私が思うのは、このパンデミックで不登校の数が増えたような印象を受けるが、今の子どもは、実体験がすごく少ないと思う。
- ・お腹を空かせていない子が多い。テーブルに手を伸ばせばお菓子が食べら

れ、コンビニなどで買うことが出来る。これはどうしようもない世の中の流れである。

- ・大人ができることは、実体験の場を地域人材を活かして作ってあげることだと思う。
- ・自分に選択権があり、そして想像できるということが、いかに楽しくて素晴らしいことかを知って欲しい。不登校で籠っている子やなかなか外に出てこない子には、難しいが、地域の大人が声かけをしたり、学校の先生へ声をかけてみるなど、テンプレートが必要だと感じる。
- ・私が個人的に感じていることだが、生きていくためには、根本的に採る作る食べるということが重要である。私はそれが非常に大事だと思っていて、自然体験などにヒントがあると思っている。
- ・例えば農業体験、畑仕事などは、最初、子どもは嫌がると思うが、あえて日の当たるところに連れて行き、地元の農業の方と一緒に農業体験をさせ、塩おにぎりや味噌汁を味わせてあげたい。そして、そういうもののおいしいんだっていうことを子どもに知ってほしい。
- ・この資料には、チャレンジホムの合同体験ということで、海浜自然の家やアクアマリンに行ったり、いろいろ企画している。その中でも、アクアマリンの魚釣りコーナーで魚を釣って食べてみるとか、いわきの海で潮干狩りを体験させてみるなど、そのような体験が、今の子には必要で不足していると感じている。
- ・不登校の子はすごく純粋なので、自分に合う人合わない人、大人が何を考えているか直感的に感じている。子どもが心を許す人は、その子その子で違う。ケースが違うので、教育現場にいる先生方とか、教育相談にのってくれる先生方の中で、そのあたりを気にしながら、いろんな活動の場を不登校の子に与えてほしい。
- ・まずは、家から出す。学校はその次の話で、まず人と触れ合うことが大事だと思っている。

【総合教育センター】

- ・直近の合同体験活動は、いわき海浜自然の家で餅つき体験を行った。
- ・担当の報告を聞くと、今ほどのご意見のように、自分で体を動かし、お腹を空かすまでの過程、そこからお餅が美味しいと言いながらパクパク食べるのが大変印象的だったとの報告を受けた。
- ・いわき市は広域都市であり、各チャレンジホームと地域や公民館などとも連携を図り、子どもたちに対して、継続的にどのような豊かな体験ができるかを模索していきたいと思う。

【長澤氏】

- ・今、東京の大田区で不登校特例校の計画に携わっている。
- ・不登校ではないが、川口市に夜間中学の学校を新しく作る計画にも携わっているが、不登校の理由は非常に多様である。

- ・いわき市では、それを課題として捉え、様々な取組みをすでにされていることに、敬意を表したいと思う。
- ・多様な不登校の子に対して、どのような場を用意するか。何か1つの施設をつくればいいのではなく、様々な場、様々な施設、それをシステムとして整えていく観点が大事である。
- ・どこを抑えれば、より多様な子どもに応えられるかということを、今取り組んでいることを手がかりにして、さらに広くシステムを整えていくことが大事である。
- ・いわき市のこれまでの実践を踏まえると、さらに整理の仕方があると思われる。いわき市の場合、広域であることから、システムを整えるときにどのようにベースとするかだが、でも、すでに取り組んでいること自体が、何よりこれから豊かに、子ども達を育てていくうえでベースになるものと感じた。

【服部教育長】

- ・センター所長から話があったが、今とりあえずの取組みとしては、チャレンジホームの箇所数の増設というのを考えている。これは本市の広域な面積をカバーするための措置であり、わたしは、これは、あくまでも対症療法だと思っている。
- ・学校から不登校を出さないことも大事だと思っており、それが学校の魅力を高めるような気がする。
- ・私の経験上、学校で楽しかった思い出というと、大体給食だったり、休み時間に遊んだとか放課後、校庭で遊んだとか、そんな思い出が思い浮かぶ。今の学校はコロナ禍以降、給食もあまり話さず、前を向いて食べるとか、学校の管理上の問題もあり、放課後も児童を帰らせるため、子どもたちだけで遊ぶこともなく、学校を軸にした楽しい体験は無くなってきていると思う。
- ・細々としたこともあるが、このようなところから何か楽しさを改めていけたらと思っている。このような取組みは、チャレンジホームもそうだが、学校や行政側だけで実施することは、現実的に難しい状況になってきていることから、行政以外の民間の方のサポートが必要であり、協働に取り組む必要があると思っているので、検討していきたいと思う。

【市長】

- ・今日は活発な意見交換ができたと思う。
- ・長澤先生から他市の事例の話をしていただき、私も教育長と議論しながら、いろいろな可能性を考えてきたが、広域であることが問題である。
- ・仮にいわき駅のそばの中心地にチャレンジホームを作っても、四倉や久ノ浜からは通えないことは、絶対起こり得るので、まずは8ヶ所ぐらいの拠点を整備して、それを充実させていくことが出発点としてできることと考えてきたところである。それをうまく磨き上げていきたい。

- ・フリースクールや市内の子ども食堂にも関心がある。教育委員会の職員や総合教育センターの職員が核となって頑張ってくれているが、それこそサポートしてくれる方々もうまく巻き込んで、宮沢委員が言われたように、体験を通して自分の好きな大人を見つけられる。さらに、阿部委員も言われたようになかなか自分も言葉にできないとか表現できないなどの話があったが、そのようなきっかけが、学校の先生や教育委員会だけだと限界があるようなところもあることから、いろいろ選択肢を広げていきたい。
- ・いわき市の地域特性も含め、財源も限られている部分もあり、このような中でも頑張っていきたいと思っている。
- ・明石市や大田区の事例もあるが、明石市と同じくらいの一般会計 1,400 億円で、人口もそんなに変わらないが、いわき市の面積は、明石市の約 25 倍あり、水道管路の延長も 2,000 キロ、市道総延長も 3,000 キロで、日本列島と同じ長さである。先日の台風災害が発生すると、50、60 億のお金がかかり、このような状況の中、言い訳にはしたくないが、市の広域性や人口の分散化などの特殊事情がある中で、不登校といった全国共通の問題に立ち向かわなければならない。
- ・長澤先生がお話ししたように、今取り組んでいる基盤があると言われて、我々もそこをしっかりと受けとめながら、今までやってきたものをいかに磨き上げていくようなことを、目指しながら頑張っていきたい。
- ・体験の中でも失敗したり、そこから学んだりとか、小峰委員が言われたように、長期欠席が 30 日に満たない、つまりチャレンジホームの対象にならないような初期段階の子などを見つれたりするのも、先生が 1 人対クラス全員で対応していることが原因であることもあり得ることから、そのようなところも、お力添えをいただき、予算や学校のキャパシティの中で限界あるところもいろいろな団体の力添えを得ながら、難しい課題を乗り越えていくことがポイントだと感じた。
- ・本日は貴重な意見をいただき、ありがとうございました。
- ・長澤先生、何度も本市に足を運んでいただき、貴重なアドバイスをありがとうございました。今回このような講演をしていただいたので、今後、学校施設整備を進めていく際は、長澤先生にアドバイスいただきながら、いろいろな課題を乗り越えて頑張っていきたいと思う。

3 閉会

【署名】

根本 紀太郎

宮澤 美智子